日向が丘の少女
七人兄弟
ネバタ号の少年

少年少女世界文学全集 37

少年少女
世界文学全集

七人兄弟
キヴィ作・尾崎　義訳

ネバタ号の少年
アクセルソン作・宮原典子訳

37

講談社

少年少女世界文学全集37
北　欧　編　第3巻

著者の了
解により
検印廃止

N. D. C. 949
講談社　昭和36
422P　23 cm

昭和36年9月20日発行

訳者代表　矢崎源九郎
発行者　野間省一
印刷者　北島織衛

発行所　東京都文京区音羽町3ノ19　株式会社　講談社
振替口座東京　3930　電話大塚（941）大代表 311）

印刷　大日本印刷
製本　大製株式会社
本文用紙　本州製紙
背皮　株式会社石井
クロス　日本クロス

定価　380円

© 矢崎源九郎　昭和36年

PRINTED IN JAPAN

目　次

少年少女 世界文学全集

第 37 巻
北欧編第 3 巻

日向が丘の少女……ビョルンスティルネ・ビョルンソン作　矢崎源九郎訳……9
一　もみの木農場……11
二　美しい金髪の少女……27
三　ふたりの心……46
四　平和の園……62
五　あらそいのはて……81
六　かなしい日々……100
七　子を思う母……115

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

八　信仰ふかい人々……123
九　しあわせのおとずれ……144
七　人兄弟……アレクシス・キヴィ作　尾崎義訳……155
一　おいたち……157
二　愛の小鳥……170
三　逃亡……183
四　ふろ場にて……199
五　あたらしい出発……214

六　クリスマスの夜のできごと……229
七　荒野の死闘……246
八　岩の上の法律……263
九　幸福への道……275
ネバタ号の少年……295
アクセル・アクセルソン作
宮原典子訳
一、小船長……297
二、海国少年……299
三、すばらしい考え……303

四、ネバタ号……307
五、国旗のもとで……311
六、あやしい水夫……314
七、潜水艦の襲撃……319
八、ふたりのひみつ……326
九、あやしい無電……331
十、スパイ……336
十一、発炎信号……340
十二、あやしい船……343

十三、とらえられて……346
十四、海戦……350
十五、敵の軍艦……355
十六、海にただよう……360
十七、ふかとあらそう……365
十八、無人島……368
十九、あらし……372
二十、船員の道義……376
二十一、すくわれる……381

二十二、ばれる……385
二十三、とりしらべ……389
二十四、はかりごと……396
二十五、脱走……400
二十六、ふるさとへ……404

解説……山室静
矢崎源九郎
尾崎義
宮原典子……410

読書指導……滑川道夫
飛田文雄……417

装本　池田仙三郎

さしえ　西村保史郎

永井　潔

松野一夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日向が丘の少女

ビョルンスティルネ・ビョルンソン作
矢崎源九郎訳

日向が丘の少女について

「日向が丘の少女」は、たいへんきよらかな、美しい小説です。でも、小さな読者には、すこしむずかしいかもしれません。やはり中学生いじょうのかたがたによんでいただくのがよいと思います。

ティーンエージャーの読者には、「赤毛のアン」だの、「アンの青春」だのといった、いわゆるアン・シリーズや、アメリカのデイトものがたいへんよろこばれているようですが、この物語は、そういう小説とは、だいぶおもむきがちがっています。

ここには、波乱にとんだすじの起伏もありません。むしろ、たんたんとしすぎていて、おもしろい小説とはいえないかもしれません。でも、そのかわり、ノルウェーのきりたった山々や、そこにとりかこまれたせまい谷間を背景として、そぼくで、純粋な農民たちのすがたが、いきいきとうつしだされています。そして、わかい青年男女のきよらかな愛情が、このうえもなく美しくえがかれています。

おちついて、ゆっくりとよんでくださるなら、おそらく、しみじみとした、ふかい感動にうたれることでしょう。

(矢崎源九郎)

さしえ・西村保史郎

一　もみの木農場

大きな谷間には、ときとして、四方八方にひらけた高い場所があり、そこには、太陽が朝のぼってから夕がたしずむまで、ずっと光をそそいでいる。そして、あまり太陽の光のあたらない、もっと山すそのほうに住んでいる人たちは、そういう場所のことを日向が丘とよんでいる。

いま、これから話そうと思っているむすめも、そういうところに住んでいたので、その場所の名まえをとって、そのむすめの農場は日向が丘とよばれていた。そこは、秋には雪がいちばんおそくつもったし、春にはまっさきにとけたものだった。

この農場の人々はハウゲ派（ハウゲを宗祖とする一派）の信者で、ほかの人たちよりもねっしんに聖書をよんだので、そういうところから、読書家とよばれていた。主人はグットルムといい、妻はカーレンといった。ふたりのあいだには、男の子が生まれたが、その子はなくなった。それから三年のあいだというものの、ふたりは洗礼盤のおいてある、教会の東側には、一ども近づかなかった。

三年の年月がながれたとき、女の子が生まれた。女の子は、なくなった男の子にそっくりの名まえをつけられた。つまり、男の子はシュンネーブとよばれていたから、こんどの女の子はシュンネーブとよぶことにしたのだった。なぜって、これいじょうにシュベルトに近い名まえは、見つからなかったからである。

けれども、母親は女の子のことを、シュンネーベとよんでいた。というのは、子どもが小さいうちは、名まえのあとに「ミン（わたしの）」ということばをつけてよぶのがふつうなので、そのためにはシュンネーベというほうが、いいやすいように思われたからだった。

それはともかくとして、女の子が大きくなると、みんなは、母親とおなじように、シュンネーベとよんだ。そして、たいていの人が、日向が丘のシュンネーベのような美しいむすめは、まだこの村に生まれたことはない、といったものだった。

女の子は、小さいうちから、日曜ごとに、お説教をききき

に、教会へつれていかれた。もちろん、女の子は、さいしょのうちは、牧師が演壇の上に立って、壇のすぐ下にすわっている、囚人のベントをしかっているのだとしか、思わなかった。それでも、やっぱり父親は、女の子をつれていこうとした。「なれるようにな。」というのが、かれのいいぶんだった。母親も、それとおなじ考えだった。もっとも、母親のほうは、「るすちゅう、子どもがどうしているかがしんぱい。」ということだった。

農場の、子ひつじや、子やぎや、子ぶたなどの発育ぶりが感心できなかったり、めうしのぐあいがわるかったりすると、その家畜は、きまって、シュンネーベのものにされた。そうすれば、母親などには、そうきめたしゅんかんから、家畜のぐあいが、よくなるように思えるのだった。父親のほうは、そのためだとは思っていなかったが、それでも、「家畜が、うちのだれのものであっても、とにかく、よくそだってくれりゃいい。」と考えていた。

谷の向こう側の、高い山のすぐふもとのところに、もみの木農場とよばれる農場があった。どうしてこうよばれたかというと、このあたり一帯で、たった一つしかない、大きなもみの木の森のまん中にあったからである。

いまの主人の曽祖父というのが、かつて、ホルシュタインに駐屯して、ロシア兵をむかえうった軍隊にはいっていたのだが、そのときの行軍のさいに、めずらしい外国の植物の種を、はいのうに入れて故郷にもってかえってきたのだった。かれは、その種をじぶんの家のまわりにまいた。しかし、ときがたつうちに、その植物は、つぎつぎとかれていった。ただ、ふしぎなことに、その中にまじってきた、いくつかのもみの木の種だけが生きのこって、大きな森となり、いまでは四方八方から家の上にかげをなげあたえているのだった。

ホルシュタインに従軍した男は、祖父の名まえをもらってトールベルンといった。そしてその長男は、父の父の名まえをもらって、セームンといった。この農場の主人たちは、こんなふうに、思いもおよばない遠いむかしから、かわるがわる、トールベルン、セームンとよばれてきたのだった。ところが、もみの木農場には、一代おきにしか幸福はやってこなくて、トールベルンとよばれる男のばあいはいつも不幸だというような、いいつたえがあった。

いまの主人のセームンは、長男が生まれたときに、このい

いつたえのことを、いろいろと考えてみた。けれども、思いきって先祖からの伝統をうちやぶることもできないままに、生まれた子には、例によってトールベルンという名まえをつけたのだった。

ただ、それにつけても、子どものしょうらいが、ばかばかしい世間のうわさにじゃまされるようなことがあっても、それをきりぬけてすすむことができるだけのものに教育してやりたい、と、父親は考えた。じぶんでもはっきりとはわからなかったが、子どもの気性はひどく強情のような気がした。

「この気性を、追いだしてやらなくちゃならん。」

と、かれは母親にいうのだった。

トールベルンが三つになると、父親は早くもむちを手にした。かれが子どもにいいつけて、なげだしたまきをいやおうなしに、もとの場所にもっていかせたり、なげおとした茶わんをひろわせたり、いじめたねこをなでさせたりすることは、たびたびだった。母親のほうは、父親がこんなきもちになると、きまって、外へでていってしまうのだった。

セームンは、子どもが大きくなるにつれて、ますます、いろんなことをしつけなければならないのに、おどろいてしまった。それも、じぶんとしては、ぐんぐんきびしくしつけてきたつもりだっただけに、なおのことびっくりしたのである。かれは、子どもに、早くから読み書きを教えたり、畑へいくときもいっしょにつれていって、たえず目をはなさないようにした。母親のほうは、大きな所帯のきりもりをしなければならないうえに、小さな子どもたちもいた。だから、毎朝子どもにきものをきせてやるときに、なでてやったり、いいきかせたり、祭日に家族のものがみんなあつまるときに、父親としたしそうに話すくらいのことしかできなかった。

ところでトールベルンはといえば、ちょっとしたことで、よくしかられた。たとえば a-b を ba でなく、ab といったからといっては、しかられ、またときには、父がじぶんをうっても、じぶんはそのまねをして小さい妹のイングリッドをうってはならないんだといっては、しかられた。すると、そのたびに、「ぼくひとりが、こんなにひどいめにあわされて、妹たちはあんなによくしてもらってるなんて、へんだなあ。」と、かれは、ひとり思うのだった。

トールベルンは、たいてい、父親のそばにいたが、とくべつ父親にむかって話しかける勇気もなかったから、しぜん、

無口になっていった。といっても、考えにとぼしいわけではなかった。けれども、いつだったか、ふたりでぬれたほし草をひっくりかえしていたとき、ふと、かれの口をついて、こんなことばがもれでた。

「むこうの日向が丘じゃ、ほし草がみんなかわいて、とりいれがすんでしまったっていうのに、ここじゃ、まだぬれてるってのは、どういうわけなんだろう。」

「あっちは、ここよりも、日がよくあたるからさ。」

トールベルンは、いつもじぶんがながめてはよろこんでいる、むこうの山の日の光は、こちらにはあたらないんだ、ということに、このときはじめて気がついた。その日からというもの、かれの目は、まえよりもずっとたびたび、日向が丘のほうへそそがれるようになった。

「そんなところにすわって、ぽかんと口をあけてるんじゃない。」と、父親はいうなり、ピシャンと一つ、ほっぺたをたたいた。「この下に住んでるおれたちゃ、おとなも子どもも、せいいっぱいはたらかにゃならないんだ。さもなきゃ、作物もできやしない。」

トールベルンが七つか八つになったとき、セームンは下男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com